

歌舞伎『盛綱陣屋』を鑑賞（桜の咲き始めた国立劇場で）

上原 昇（2組）

東京で桜の開花宣言が出されたのは3月20日（日）のことです。

翌日春分の日（21日）に、国立劇場（千代田区）へ出かけました。

演劇業界に詳しい知人から「今、面白い芝居をやっているから行ってみたら」と言われ、観たのは、国立劇場3月歌舞伎公演『おうみげんじせんじんやかた 近江源氏先陣館 もりつなじんや 盛綱陣屋』です。

歌舞伎に詳しい人はご存知でしょうが、本作は1769年（明和6年）、人形浄瑠璃として大坂で始まり、翌年から歌舞伎として上演されたとのこと。

話は大坂冬の陣（1614年（慶長19年））で、豊臣・徳川が戦った時、敵味方となった真田信之・信繁（幸村）兄弟をモデルにしています。

江戸時代には、芝居で徳川に関係する名前はそのまま使えないので、佐々木盛綱・高綱兄弟として、時代も鎌倉時代に置き換えています。

驚いたことに、劇場に入るとロビーには上田市と真田氏の特別ギャラリーが設置されて、関連パネルなどが何枚も展示されていました。（写真1）

上演に先立ち、《歌舞伎名作入門》「“盛綱陣屋”をたのしむ」というコーナーがあり、若手歌舞伎役者による作品の解説がなされましたが、そのオープニングに「真田丸」のバイオリンのテーマ曲が流れるのも斬新な試みでした。

今ちょうどNHK大河ドラマでは、「真田丸」の脚本を手掛けた三谷幸喜氏が「鎌倉の13人」を担当しているのも偶然でしょうか。

主演の尾上菊之助は初めての盛綱役を堂々と演じますが、この役は彼の岳父・二代目中村吉右衛門の当たり役として有名です。残念ながら吉右衛門は昨年1月に亡くなってしまいました。今回、子役ながら立派な演技を披露した尾上丑之助くん（8歳）は菊之助の長男です。吉右衛門が生きていたら孫の熱演をどんな顔で見ていたでしょうか。芝居の筋の紹介はネタバレになるので控えます。

観劇が終り外へ出てみると、劇場前広場の桜が咲き始めていて、首都圏の春爛漫はもうすぐでそこまで来ています。（写真2）

来月は、上田城址公園の桜も見事に咲き誇ることでしょう。

コロナが収まって、帰省してお花見ができることを願いつつ帰宅しました。

なお、本公演はアクシデントがなければ、3月27日（日）が千穉楽となります。

本稿の掲載日にも依りますが、興味のある方は国立劇場までどうぞ。

次ページに写真：1は信州上田コーナー、2は国立劇場の桜、3は公演チラシ



1 信州上田コーナー



2 国立劇場の桜

3 公演チラシ



(2022年3月22日記)
以上